

(2 節)「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」ヨハネの激しいメッセージが語られました。その地域の多くの人々は (6 節)「自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受け・・・」しました。そして、主に従う生活に入りました。それにしても、すなおにヨハネの呼びかけに応じた人々が、こんなに多く与えられたことは素晴らしい祝福でした。

しかし、残念ですが、すべての人々が悔い改めた とは限りませんでした。

(7 節) パリサイ人、サドカイ人もヨハネの所にやって来ました。ところが何と、ヨハネから激しい非難を受けました。7 節には「大勢のパリサイ人やサドカイ人が、バプテスマを受けに来る」と書かれています。彼らも今、ヨハネからバプテスマを受けようとしてやって来たはずなのに、 どうしてでしょうか？ それは必ずしも、彼らがヨハネのメッセージを聞いて罪を悔い改めたからではありません。彼らは、神様の前に意図的に悔い改めることをしませんでした。

なぜでしょう？ 彼らが悔い改める事が出来なかった 3 つの理由です。

——— 彼らが悔い改める事が出来なかった理由 ———

・**その 1**、選民意識があったからです。彼らは自分たちが、神から選ばれたユダヤ人である、アブラハムの子孫である、と言うだけで、他の民族より特別に祝福されていると思い込んでいました。それだけの理由で自分たちは、すでに救いに与かっていると勝手に考えていたのです。ですから、ヨハネは厳しく言いました。

(9 節 A)「あなたがたは、『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で思っははいけません。」

・**その 2**、ユダヤ人の中でも彼ら（パリサイ人、サドカイ人）は、特別に身分の高い人々でした。きっとそんな自尊心が、彼らの悔い改めの邪魔をしていたのでしょう。

・**その 3**、彼らは、ヨハネをライバルと思っていました。そんなヨハネを多くの群衆が慕っていました。ですからいつかはそんな群衆が、彼らの地位を脅かすのではないかと内心恐れていたのです。これでは、とても神様の前に悔い改めなど出来たものではありません。

——— 神様に出来ること、出来ないこと ———

神様は、たとえどんな小さな石ころのように見える人々でも、そんな人々を救って、無条件で天国へ迎え入れてくださる神様です。

(9 節 B)「・・・神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができます。」 でも自らを正しい者として悔い改めようとしないならば、この恵みを受ける事はできません。

神様の福音は、私たちに2つの道に導きます。

①罪を認め、悔い改めるならば、救われて永遠の祝福です。

②罪を認めないで、悔い改めないならば、永遠の滅びです。

人は、いつでもどちらかを選ばなくてはなりません

。

ヨハネは形ばかりのバプテスマを受けにきたパリサイ人、サドカイ人たちの本心を見抜きました。そして、厳しく非難して、次の様に言いました。(7節B～12節)

ですから、バプテスマを受けたからと言って救われたわけではありません。

ヨハネのメッセージの3つの内容です。

——— 悔い改めに相応しい実を結びなさい ———

・第1、(7、8節)「まむしの子孫たち、・・・悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」

本当に厳しいヨハネのことばです。「あなた方は、神を信じていると言いながら、このまはなんですか？」確かにその人の悔い改めが本物ならば、必ず結果が伴うはずですね。

イエス様も次の様に言われました。(7:17 節)「良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。」真の悔い改めは必ず、救い主を信ずる信仰という実を結ぶはずです。悔い改めなしの信仰はあり得ないし、信仰なしの悔い改めもあり得ません。

・第2、(9節B)「・・・神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」この言葉は、パリサイ人、サドカイ人に対する痛烈な皮肉です。「石ころからでも」と言うのは比喩的な誇張表現です。ここでヨハネが言いたかったのはこうです。

「パリサイ人たちが石ころの様だと軽蔑していた下層階級の人々、律法を守らない様な人々からでも、神様は悔い改める人を起こして、その人々を救う事がお出来になります。家系、社会的な身分は救いとは何の関係ありません。むしろ、自分の正しさを誇る善人よりも、謙遜に自分の罪を認める悪人の方が、はるかに真に悔い改める者であると言う事をパリサイ人たちは、忘れてはなりません。」以上、これがヨハネの言いたかったことです。

私たちも、この石ころの様な価値のない様な者であるかも知れませんが、でも信仰によって確かに、私たちはアブラハムの子孫のはずです。

・第3、(10節)「斧はすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

罪を悔い改めないならば、永遠の滅びです。神様から裁きを受けなければなりません。

繰り返しますが、ここに福音の2面性があります。

①罪を悔い改める者は救われます。神様のもとにおかれ、永遠の祝福に預かる事ができます。

②悔い改めない者は、神様の審きを受けます。永遠の死と、滅びです。

私たちの前には、この対照的な2つの道が置かれています。

人はどちらかを選ばなければなりません。

人はいつも、決断の時に立たされています。

私たちも同じです。

——— ヨハネは近寄りがたい人物？ ———

さて、今まで私たちは、神様によって召され、預言者として荒野に現れたヨハネについて学んできました。そのヨハネですが、その姿はあまりにも超人的、野性的でした。彼は誰に対しても激しいメッセージで悔い改めを迫りました。そんな彼を見ていると、あまりにも強くて、立派過ぎて、近寄りがたい人物のように見えてしまいます。確かに、彼は偉大な人物であったことは間違いありません。ですから、多くの民衆の中には「このヨハネこそが、来るべきメシアなのではないか？」と思った人も多かったのです。

(ルカ 3:15 節)「人々はキリストを待ち望んでいたので、みなヨハネのことを、もしかするとこの方がキリストではないか、と心の中で考えていた。」この様に、ヨハネは多くの人々から神様と間違われるほど、有名であり、人気がありました。ですから大勢の人々が彼の回りに集まって来たのも当然でした。

さて、11 節のみことばに目を向けてみましょう。実はこのみことばの中に、更に素晴らしい本当のヨハネの偉大さを見るのです。彼は人気に溺れず、有頂天にならず、自らを神としませませんでした。ヨハネはそこで、自分自身を次の様に語っています。

——— 謙遜なヨハネ ———

(11 節)「・・・私の後に来られる方は私より力のある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格もありません・・・」履き物を脱がせるとは、当時の習慣では奴隷の仕事でした。つまりヨハネは「この私はイエス様の奴隷となる値打ちもありません」とまで、語ったのでした。まさに地べたにくっついてしまうほどの謙遜に砕かれているヨハネの姿をそこにみるのです。

実はその後、しばらくして、イエス様が活動され始めた頃の出来事ですが、彼の回りの多くの人々が、ヨハネのもとから、イエス様の方に去って行ってしまった時がありました。その時のことをヨハネの弟子たちが知って非常に心配しました。そして、ヨハネに告げました。その時ヨハネは次の様に弟子たちに答えました。

(ヨハネ 3:30 節)「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」これは、神様のみこころを正しく知った者としての信仰告白ではないでしょうか。確かに、恥は我がもの、栄光は主のものです。

——— ヨハネが謙遜である理由 ———

ではなぜ、ヨハネはこれ程までに謙遜になる事が出来たのでしょうか？ ヨハネは自身を良く知っていました。

第1に、彼は、自分が神によって造られた一人の人に過ぎないことを知っていました。

第2に、彼は、自分が罪許された罪人である事を知っていました。

第3に、彼は、自分があわれみの中に生かされている者に過ぎないことを知っていました。

第4は、彼は自分に与えられている神からの使命を知っていました。

ヨハネの人生は最後まで、救い主イエス様の先駆者としての働きをつらぬき通すことでした。

さて、神様は私たちに対しても、この箇所を通して大切なことを教えようとされています。

私たちも、イエスさまの前に謙虚な姿勢を貫いて、神様からいただいた、使命を全うして行きたいのです。

世界的に有名なメッセンジャーがいました。その方がいかにして救われたか？

一人の司会者がインタビューしました。

その有名なメッセンジャーは答えました。それは彼が生まれて始めて教会に行った時の事でした。誰からも話しかけられず居場所がなくて困っていた私に、名もない一人の青年が隣に座ってくれました。礼拝後、彼は聖書から「四つの法則」を取り出すと、どもりながら汗をかきかき、「四つの法則」をたどたどしく読んでくれました。この有名なメッセンジャーは、この青年の個人伝道によって救われたのでした。神様はこの勇気ある青年に恥をかかせませんでした。

イエス様のことば。(ルカ 17:10 節)「・・・あなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

私たち、ヨハネの共に道に進みましょう。